

機関番号：14403

研究種目：若手研究 (B)

研究期間：2008～2010

課題番号：20730429

研究課題名 (和文) 経験の表現による子どもの自己の構成過程に関する理論的・実践的研究

研究課題名 (英文) Construction of children's self in the presentation of experiences: Theoretical inquiries and applications to the education in elementary school

研究代表者

小松 孝至 (KOMATSU KOJI)

大阪教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：60324886

研究成果の概要 (和文)：幼児期・児童期の子どもたちが、日常的な会話や学校での教育実践の中で「過去の経験を表現する」活動が、子どもの自己の発達において持つ意味を理論的に明確化し、“presentational self” (観察者にとって固有の意味を持つような、相互作用における自他の布置から明確化する自己) の概念を提案した。また、その結果をふまえ、日記指導、作文 (綴方) やスピーチといった小学校の教育実践を意義づけ、従来の「語られた情報量」から自己の育ちを考えるアプローチと異なる分析を試みた。

研究成果の概要 (英文)：In this study, I investigated children's "presentation" about their past experiences in natural conversation or activities in elementary school, considering their importance in the construction of children's self. From theoretical perspective, I proposed a new framework for finding out children's "presentational self" in the configuration of a child and others emerging in the interaction that have unique meaning for observers. Applying this framework to the analysis of educational practices in elementary school, *Saku-bun* and speech activities, I have discussed the emergence of children's "presentational self" that is not reducible to the amount of what children expressed in these activities.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008 年度	900,000	270,000	1,170,000
2009 年度	500,000	150,000	650,000
2010 年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	2,100,000	630,000	2,730,000

研究分野：発達心理学

科研費の分科・細目：心理学・教育心理学

キーワード：発達心理学, 文化心理学, 自己, 幼児, 児童, 教育実践, 親子関係, 物語

1. 研究開始当初の背景

私たちが会話などの相互作用において自分の経験を表現する (語る) 行為は、社会文化的な文脈の中での「自己の構成」過程として捉えられ、研究されてきた (例 Miller, Potts, Fung, Hoogstra & Mintz, 1990)。研

究代表者は、このような考え方を背景に、次の研究を行ってきた。

(1)子どもの保育での経験に関する母子の会話に着目し、複数の母子から、1年間 (2組については2年間) 合計 100 時間を超える継続的な録音記録を得るとともに、その分析枠

組みを明確化した(小松, 2004)。研究の結果、役割や能力など、保育の中で明確化する様々な観点をもとに自他を位置づける表現のレパートリーが増加し、これらを組み合わせることで、他者との関係の中の子も自身の姿がより精緻な形で語られるようになる変化過程を示した(小松, 2006)。

(2) 幼稚園や小学校など学校教育での、スピーチや作文、日記の指導などに着目し、これらの中で子どもが自己や他者をどのように語るのか、その際、教員や保育者からどのような働きかけがなされるのかを検討した。具体的には、作文・日記等の指導を継続的に行っている複数の小学校教諭への探索的なインタビューを行うとともに、3名の小学生が小学校5・6年生時、担任教諭の指導のもとで毎日繰り返し書いた日記の記録(計1567日分)から、自己と他者との関連づけに注目して個人の表現スタイルを明らかにすることで、子どもが日記を通して対人世界を構成しつつ自己を位置づける過程を分析した。

さらに、研究代表者はこうした「子どもの自己」に関する考察をすすめるため、平成19年度に5カ月あまり渡米し、文化心理学の権威であるJaan Valsiner教授(Clark大学)のもとで、幼児・児童の参加する相互作用(会話など)に関する理論的研究を行った。

一方、この研究テーマは、学校教育や子育てなどと関連し、実践的な意味も持つ。研究代表者が教員養成大学に勤務することからも、理論的な精緻化のみならず、実践に役立つ形で研究を展開する必要性が高い。

2. 研究の目的

本研究は、1. で述べた諸研究で得た資料をさらに検討しつつ

(1) 子どもが経験を表現する中で明確化し形作られる「子どもの自己」の本質に関する統合的な理論の構築とその評価を、発達心理学および文化心理学の知見と関連づけて実施する。

(2) 上記(1)の理論化および隣接領域の研究を参考に、おもに学校教育での実践と関連づけた考察や提言(スピーチ・作文・日記や日常的な会話などを意味づけ、そうした相互作用を活性化させる提言)を行う。

の2点を目的として実施された。

3. 研究の方法

(1) 使用するデータ：研究にあたっては、研究代表者がこれまで収集した資料 すなわち

①100時間を超える母子の会話記録およびトランスクリプト、母親への面接記録

②作文・スピーチ等を実践する教諭12名への面接記録

③3名の小学校5・6年生が担任教諭の指導のもとで書いた日記の記録

等を活用した。また、現職教員である大学院生の協力のもと、小学校3年生に対する日記指導の記録や、小学校5年生におけるスピーチ活動の記録(いずれも1年間継続されたもの)を検討する機会を得た。

(2) 理論的考察 以上の資料をもとに、子どもたちが経験を語る中で構成される「自己」をめぐる理論的なモデルを文化心理学・発達心理学の理論や資料等と関連づけて精緻化した。この過程では、平成19年度に共同研究を行ったJaan Valsiner教授(米国・Clark大学)の助言を継続的に得つつ、海外での学会発表、英語論文によってこの理論を提示し、多くの研究者からの示唆を得ることとした。

(3) 教育実践との接続をめぐる考察 教育実践との接続については、生活綴方運動をはじめ、「表現と自己」に結びついた教育実践の中でこれまで構成されてきた言説を、研究代表者の研究成果等と関連づけ、従来の教育実践や、教育関係者・保護者に共有される言説や理解と連続性をもつ形で、子どもの「自己」の発達に関する議論を行うこととした。

4. 研究成果

(1) 理論的考察

おもに「保育での経験に関する母子の会話」の録音記録をもとに、従来の研究で重視されてきた内的表象としての「自己」とは異なる「自己」の捉え方として、ゲシュタルト心理学の基礎的な考え方、相互作用分析の考え方、および、Valsinerによる「記号的媒介」の理論を踏まえて“presentational self”の概念を新たに提示し、学会発表(発表②③④⑤⑥)を行うとともに論文(論文①②)を執筆した。内容は以下のようなものである。

①presentational selfの概念をめぐる

Harré & van Langenhove (1999)は、Goffman(1959)の議論をもとに、「正規の統一体(formal unity)」としての「個人のアイデンティティ」とは異なる自己のあり方として、「個人のペルソナのレパートリー」としての自己という考え方を示している。

この理論では、“position”が、特定の行動をとるための権利と義務の集合体と考えられ

(Harré & Moghaddam, 2003)、相互作用の中で互いのアイデンティティの相対的な関係

の中で個のアイデンティティがダイナミックに構成されることが“positioning”とされる。こうしたpositioningは、親子の会話にも見て取ることができる。

一方、語られる対象としての他者との関係に注目して会話を分析すると、小松(2006)が示したように、役割などの観点をを用いて自他を単純に列挙・対比する会話から、その枠組みを維持しつつ、次第に他者の特徴の説明や自他のかかわりの具体的なエピソードなどを含む複雑な会話がみられるようになっていく。

このように、自己と他者にかかわる会話の事例にくりかえしあらわれた「列挙(enumeration)」は、「その構成要素からなる、等質な言及対象のひとそろい(ensemble)を喚起する」「修辞上のデバイス」である(Dubois & Sankoff, 2001)。他者と自己の列挙では、対象児自身のメンバーシップや、他者との共通点・差異などが表現されている。それは、友人を知る母子にとって、保育の中での対象児の姿をきわめて具体的に提示するものとなる。

以上2つの観点から、自己と他者を語る会話では、ひとまとまりの会話のやりとりをとおして、観察する我々の意識に「浮かび上がってくる」「自己」を捉えることができる。つまり、positioningのプロセスと自己と他者の列挙を基礎とする「関係の中の自己」の表現は、いずれも、いくつかの要素(ターン・友人名)が組み合わされ、表現されることから具体的な像を結ぶのである。

こうした要素と全体との関係は、ゲシュタルト心理学の祖の1人であるvon Ehrenfels(1890/1988)が、メロディーと個々の音との関係を例示しつつ論じた“Gestalt Qualities”(相互に分離可能な要素の複合体によって、我々の意識に生じるpresentationの内容)の概念に近いものと考えられる。

会話(語り)と子どもの自己を対象とした従来の研究では、結局のところ「記憶」や「理解」が重視され(図中A)、個々の発話内容は細分化されて数量的に集約されてきた。しかし、こうしたアプローチは、会話において生じる表現の作用を十分に記述できない。子どもが参加する自然な相互作用の中では、本研究で論じたような形で、様々な表現のレパートリーを用いて子どもの自己が明確化される。これは、これまでのrepresentationの重視との対比のもとで、“presentational self”と呼ぶべきものといえる(図中B)。

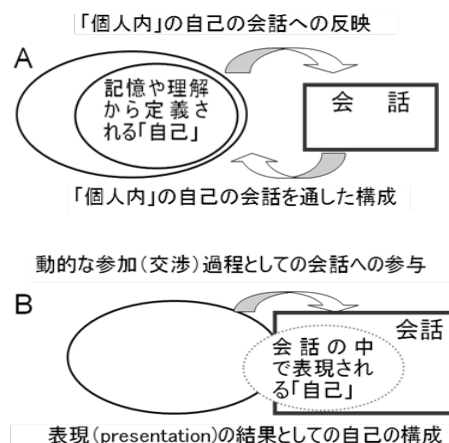


図 自己に関する二つのモデルの図式的表現

②presentational selfの基礎となる記号的媒介過程

なぜ、相互作用のこれらの側面が私たちに「子どもの自己」の存在を意識させるのだろうか?本研究では、そこに子ども自身と他者との間のdifferentiationが2つの形で起こることを本質的な理由として考察した。

a. 相互作用のパートナーとしての他者との関係における differentiation

会話の参加者は「社会的リアリティの共有」に常にたずさわり(Rommetveit, 1992)、それを更新し続ける。つまり、会話は共有とdifferentiationの連続であり、それを意味行為として考えるならば「意味の成長(growth)」や「意味の引き継ぎ(takeover)」(Josephs et al., 1999)が生じている。会話に参加するパートナーとの関係の中でのpositioningも、このdifferentiationに基づく。私たちが会話の中に子どもの(翻って母親の)自己の存在を意識する一つの契機は、こうした共有とdifferentiationの繰り返しにある。

b. 語られる対象としての他者との関係における differentiation

本研究の資料でしばしばみられる「列挙」の中での自他の共通性と差異の明確化は、a.で述べたものとは異なる。これは「表現されたもの」のフェーズでの自他のdifferentiationであり、会話への参加者や観察者に、他者との関係の中の子どもの自己の固有性を意識させる。極端な事例を考えれば、自己と他者の名前にふれることのみでも、十分に豊かな自他の意味づけをもたらすことが示唆される。

このa.とb.の視点は、完全に分離されうるも

のではない。b.のdifferentiationが可能になるのは、会話の中での、共有されたリアリティからのdifferentiation (a.で論じたプロセス)を通してであり、このプロセス全体を通して、固有の存在としての子どもの自己が多重に明確化するものと考えられる。

②教育実践との接続

(1)において述べた理論的な考察をふまえ、それを教育実践に適用し、新たな視点を提案するために、次の検討を行い、発表した(論文③・学会発表①・図書①②)。

①基礎的考察

(1)で述べた presentational self の概念は、子どもの発達支援という文脈において、従来の発達研究がもつ「内面をことばにして精緻に耕す」ことを重視した発達観とは異なる自己観・発達観を提示する。たとえば、短いが機知に富んだ発言、あるいは沈黙なども、相互作用の中で独特の differentiation の作用をもち、子どもの自己の存在を意識させうると考えられる。

実際に、母親に対するインタビューの結果などから示唆されるのは、「語らない」ことにも意義を持たせながら自己の発達を感じ取る視点である。このことをふまれば、「子どもの自己を育てる働きかけ」を一義的に定義することは難しい。むしろ、子どもの生活のありかたを踏まえる形で自己の育ちを捉える必要があると考えられる。

②教育実践に関する考察

子どもの自己の形成への観点から小学校の教育実践を考えたとき、古くから実践されてきた作文(綴方)に注目できるが、そのなかでは「子どもの自己」が重要な視点であり続けてきた。具体的には、明治中期にはすでに「子どもの自己」が指導論の中で論じられ、明治後期になると「自己の文章は自己の生活の表現」である等の主張がみられる。また、大正期に入ると、口語体での表現の使用もあり、子どもも自己表現を積極的に行うようになった(滑川, 1977a,b)。

1930年代には、生活綴方は子どもの生活とより密接に結び付けられ、それを通して意欲・知性・協働性の育成が目指される。その中で、子どもの自己は、認識の対象であると同時に認識の主体として重視されることとなる。さらに、第二次大戦後も「子どもの自己」は作文(綴方)教育のキー・ワードであり続けている(例として野名(1983)や村山(2007))。また、明治期から行われている、いわゆるスピーチ活動についても、同様に「子どもの自己」への着目を見出すことができる。

このように、作文やスピーチ活動など、小学校で子どもが自己の経験を表現する実践では、その初期から何らかの形で「子どもの自己」が意識され、心理学との連携の動きも大正期から何度かみられる。しかし、作文を心理学的に分析した研究は、守屋らによる一連の研究(守屋, 1982; 守屋, 2007; 守屋ら, 1972)等に限られる。心理学が実験や定型化された手法、数量的分析をもとに発展したことで、個別性が高く量的に捉え難いこれらの実践は対象にされにくかったと考えられる。

これに対して、近年の質的研究法の充実などを考慮すれば、作文やスピーチ活動を対象とした研究は子どもの自己の発達を考える上で重要かつ有効であると考えられる。実践の分析にあたっては a)これらの活動が常に発達の変化と個人差を伴うことを考慮しつつ b)表現が子ども達に共有されいわば「文化的道具」として用いられることをふまえる必要がある。また、すでに述べた presentational self の考え方にみられるように、c)内容を細分化し、特定の表現様式の有無を数量的に要約する等の手法だけでなく、作文やスピーチ全体から明らかになる特徴(例 描写の視点の推移等)が子どもの自己のありようを示す可能性を重視する必要がある。

③日記・スピーチ記録の検討

以上の②の考察をふまえ、現職教員である大学院生の協力のもと、小学校で行われる教育実践の分析に対する、本研究の理論的枠組みの適用可能性を検討した。

日記指導の記録については、既存の記録に加えて新たに小学校3年生26名の記録(1年間・632回分)を検討した。また、スピーチについては、小学校5年生が1年間に行った361回分のスピーチ記録を検討する機会を得た。

検討の結果、日記・スピーチともに、量的指標、つまり、書かれた、あるいは語られた語数や文章などの情報量に還元しにくい側面、具体的には、日記においてはその経験をみて記述する子どもの「視点」のあらわれに、また、スピーチにおいては、型どおりの(多くの子どもに共通する)順序・内容によるスピーチが崩れ、(発話量には明確な変化がなくとも)表現レパートリーが広がることで個別の固有性が明らかになる過程に、「自己」を見出すことができると考えられた。

この検討は、現在さらに精緻化しているところであるが、その結果からは、②で述べたように自己の育ちを重視してきた教育実践に対して、さらに明確な提言(日常の実践のあり方や評価の視点などについて)ができると期待される。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

① 小松 孝至 (2011) 乳幼児期のことばの学びと他者—子どもの「自己」の多様なあらわれに注目して— 発達 Vol.32, No.125, 17-24. (査読無)

② Komatsu, K. (2010) Emergence of Young Children's Presentational Self in Daily Conversation and Its Semiotic Foundation. *Human Development*, 53, 208-228. (査読有)

③ 小松 孝至・紺野智衣里・中條佐和子 (2010) 児童期の自己の発達と小学校の教育実践—作文(綴方)・スピーチ活動の心理学的な意味づけ— 大阪教育大学紀要 第IV部門 教育科学, 59, 81-95. (査読無)

<http://ir.lib.osaka-kyoiku.ac.jp/dspace/handle/123456789/25247>

[学会発表] (計6件)

① 小松 孝至 (2011) 児童期の自己の発達と小学校の教育実践—作文・スピーチ活動への心理学的アプローチの可能性
日本発達心理学会第22回大会(東日本大震災の影響により「参集せず成立」扱い, 発表予定場所: 東京, 東京学芸大学, 発表予定日: 2011年3月25日)

② Komatsu, K. (2010) The development of young children's presentational self in daily conversation: An explorative study focusing on the enumeration of self and others
6th International Conference on Dialogical Self, Athens, Greece, 2010年10月3日

③ 小松 孝至 (2010) 会話における「自己のあらわれ」をめぐる理論的考察(2)—“presentation”としての自己のあらわれをもたらす会話の中での differentiation
日本発達心理学会第21回大会, 神戸, 神戸国際会議場, 2010年3月28日

④ 小松 孝至 (2009) 会話における「自己のあらわれ」をめぐる理論的考察—幼児と母親の会話の縦断的記録から考える ‘presentation’ としての自己
日本発達心理学会第20回大会, 東京, 日本女子大学, 2009年3月25日

⑤ Komatsu, K. (2008) Self as gestalt quality: Emergence of young child's presentational self in conversation

The 5th International Conference on the Dialogical Self, Cambridge, United Kingdom, 2008年8月27日

⑥ Komatsu, K. (2008) 'Mentioning others' in the conversation between a young child and his mother: A longitudinal case study focusing on the developmental change
20th Biennial ISSBD Meeting, Würzburg, Germany, 2008年7月15日

[図書] (計2件)

① Komatsu, K. (in Press) Why and how young child's 'self' emerge in day-to-day conversation about the past? : Focusing on children's daily trip to Yochien, in Japan. In G. Marsico, K. Komatsu, & A. Iannaccone (Eds.), *Crossing boundaries: Intercontextual dynamics between family and school*. Charlotte, NC: Information Age Publication.

② 小松 孝至 (2010) ことばの発達と自己 秦野悦子(編) 子どもへの発達支援のエッセンス1 生きたことばの力とコミュニケーションの回復 pp.3-27. 金子書房

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小松 孝至 (KOMATSU KOJI)
大阪教育大学・教育学部・准教授
研究者番号: 60324886

(2) 研究分担者

()

研究者番号:

(3) 連携研究者

()

研究者番号: